

『就実論叢』第44号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2015年2月28日 発行

# シオラン断章

**Essay on E.M.Cioran**

山 本 光 久

# シオラン断章

Essay on E.M.Cioran

山 本 光 久

YAMAMOTO Mitsuhsa

ほんとうの文章家はみなそうだが、彼は〈文学〉という言葉  
言葉を軽蔑していた（…）。彼の思想が、それを移し換える  
正確な言葉を絶えず作りだしていたにすぎない。というの  
も、彼の思想は、認識を、いや文体そのものを越えたところ  
にある本質的なものに、本来の知にして、真なるものに  
つねに達していたからである。

（パトリス・ボロン『異端者シオラン』<sup>1)</sup>）

倦怠……苦痛なく苦しみ、意志なく欲し、論理なしに思考  
すること……それは否定の悪魔にとりつかれ、存在しない  
ものに呪縛されること。

（フェルナンド・ペソア『不穏の書、断章』<sup>2)</sup>）

E.M. シオランについては今さら多言を要しまい。現在では絶版になっている邦訳もある  
とはいえ、その著作のほとんどが日本語で迎えられるものとなっている。不幸にしてその文言に  
接したことのない「若い世代」のために簡単なプロフィールを示せば——「1911年ルーマニ  
ア生まれ。母国で『絶望のきわみで』をはじめ数冊を上梓した後、フランスへ。以後、パリ  
のアバルトマンの「屋根裏部屋」で「パリの穴居人、狼狂」として住み着き、『崩壊概論』  
その他刺激的なエッセイを間歇的に出版。座談の名手としても知られ、パリの有力な知識人  
の間で伝説的な存在となる。日本の心ある知識人の間でも圧倒的な支持を集めている。1995  
年没。」といったところだろうか。

事典ふうに言えば、「卓抜なエッセイストにしてペシミスト」とでもなろうが、この「エッ  
セイスト」と「ペシミスト」には若干の注釈が必要である。

＊

## 〈ペシミストとモラリスト〉

シオランの言葉を少しでも読めば、その人性に対する苛烈な論断に思わず腰を引き、この人は極めつけの悲観論者、ペシミストだと思ってしまう人がいても不思議ではない。しかしそれは早とちりというもので、巷間「座談の名手」と言われるように、彼は、わかりやすく言えば、酸いも甘いも噛み分けたユーモアの名医でもある。言い換えれば、無駄話・与太話の達人とでも言おうか<sup>3)</sup>。彼は一般的には所謂モラリスト（これはなかなか日本語にしにくい言葉で、あえて訳せば「人性の観察者」とでもなろうが、舌足らずの感は否めない）とされる。これも事典ふう言えば、モラリストとは、モンテーニュ、パスカル、ボードナグ、ラ・ブリュイエール、ラ・ロシュフーコー等の名が挙げられるのを常とするが、モンテーニュ、パスカルはとりあえず措いて、たとえばラ・ロシュフーコーなどはその箴言の辛辣さは当たらずとも遠くないにせよ、読んでいて鼻白むことも間々ある。その人間観察の眼が文字通り辛辣に過ぎて、シオランのような微笑がない。簡単に言えば、辞書的に「正し」ければいいというものではないわけで、これはラ・ロシュフーコー自身をどう規定するかにも言えることだろう。

また、「モラリスト」とは分類されないにせよ、古今東西の多くの思想家・小説家にはその作品中にモラリスト的文言が見出される。ほんの一例を挙げれば、バルザックやプルーストがその典型であり、わが三島由紀夫などは時に煩わしいくらいその手の箴言風件りを描写の途中に紛れ込ませているが、これは彼らがさまざまな人物像を描くことを要請される以上、当然と言えば当然のことだろう。そこには時に苛烈な、容赦ない人間観が見られることも稀ではないが、その一事をもって彼らに「ペシミスト」のレッテルを貼ることは軽率の誹りを免れまい。

また、通俗的な事典類ではショーペンハウエルを「ペシμισティックな哲学者」と割りつけてしまっていることが間々あるが、かいつまんで言うと、当初ジャーナリストとして思想的・社会的事象を見つめていた存在を「後知恵」的に単純なペシミストと規定することはできない。現に彼には『幸福論』（幸福という概念は古代ギリシャ・ローマ以来常に間歇的に取り上げられる）という著作もあり、現象学的哲学の先駆者と見る向きも確実に存在する。ところで「現象学」とは在来的・伝統的哲学への疑念ないしは批判として芽生えたもので、換言すれば、たとえば生活世界に対するオートマティックで習慣的な認識体系への疑念・異議・捉え返し・洗い直しとして捉えられる（たとえば、ハイデggerの下で学んだサルトルがなぜ「一杯のコップの水」にこだわったのか<sup>4)</sup>）。こうした既存の認識体系・システムにまとめて疑義を呈したのがエドムント・フッサールである（cf.『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』）。

こうした哲学＝反哲学的な流れの中で、シオランの言葉を聞き届けること。その時、シオランを平板に「ペシミスト」としてのみ捉える態度は自ずから失効するだろう。また一流の文筆家はおよそそういうものだが、彼の場合もその「思想的内容」ではなくて、その「言葉

の姿」にこそすべてがある。フランス人も脱帽する彼の見事なフランス語こそ——あえて言うなら——彼の「思想」である（ここで、「人が言う私の思想とは私の文体である」という意味のことを常々言い放っていた花田清輝を思い出してもよい）。

わざわざ言うまでもないが、かかる地平ないし文脈を抜きにして「シオラン理解」はありえないということである。

そもそも人はどういう局面でしかじかの書き手と出会い＝遭遇するのか。そのすぐれて「偶然性」を「必然性」に転化しうるのかどうか、単なる「業績」などには還元されえぬその人の認識ないし文言に反映する、反映せざるをえないもののだとすれば、そのことに人はもう少しセンシティブであっていいのではないのか、という疑念も捨てがたい（後に「20世紀最大の知性」と呼ばれたポール・ヴァレリーや、今日なお論議・研究の絶えないヴァルター・ベンヤミンが生活のたつきレベルでいかに苦難を強いられたか）。

まあそれはともかく、シオランが単なるペシミストでなかったことは後段の彼の文言をめぐる記述でなにがしか明らかになるだろうが、ここで押さえておきたいのは、たかだかの「小説的記述」と「エッセイ的言説」を無前提的に切り分ける「習慣的」と言うも愚かなだらしない認知構造である。G・ドゥルーズも夙に言うように、「習慣的」認知構造への疑義がほかならぬ哲学的営為だとすれば、この時「哲学」と「文学」はイコールになる。それが少なくとも、20世紀以降の言説の地平ではなかったのか。これは、そもそも人生あるいは世界に対する安穩とした「観照的」態度が今日では不可能であるというごく当たり前の認識にも関係する。

ここでもう少し贅言を費やせば、たとえば次のような言葉がある。

「午前五時の娼家を見たことのない者には、私たちの遊星がどんな倦怠に向って進みつつあるかを、想像することもできまい。」（シオラン『苦渋の三段論法』、出口裕弘訳）

まるで、シュルレアリスムの特異な画家ピエール・モリニエのタブローの世界をそのまま文章化したようだと言いたい誘惑に駆られる。こういう溜息まじりの苦い認識に接すると、シオランが西欧デカダンスをその両肩に堰き止めつつ今にもその堰を一気に決壊させようとするかに見えるスリリングな感覚を抱かざるをえない。

あるいはまた、次のような言葉。

「今日、諸文明の老衰というテーマでならば、ひとりの文盲でも、その戦慄において、ギボンやニーチェやシュペングラーに肩を並べることができるだろう。」（同前、傍点原文）

「世界はあまりにも老いすぎた…」と書きつけた詩人は誰だったか。「識字率」云々をいたずらに喋々する世界ならぬ世界に安住しては、こういう言葉は吐けない。名著『ローマ帝国衰亡史』の著者と一介の文盲が「肩を並べる」だって？などと怪しむ向きはよもやあるまいが、もしあれば勝手に「怪しんで」いればよろしい。「歴史とは思ひ出ならずや」と言った批評家は誰だったか。とまれ、ここでは、フランス人も舌を巻くほどの見事なフランス語散文を操ったシオランが終生カルパチアの文盲の羊飼いに想いを馳せたことを想起すればよい。

### 〈エッセイとしての思想／思想としてのエッセイ〉

エッセイ。この言葉を在来的に「随筆」とはしないこと。たとえば、モンテーニュの『エッセー』はかつて『随想録』と訳されていた（cf. 関根秀雄訳『随想録』白水社）。「随筆」は手近の辞書を参照すれば、「見聞・経験・感想などを気の向くままに記した文章。漫筆。随想。エッセー」（『広辞苑 第六版』）とある。言葉の「スタンダード」な意味を略述することを以て旨とする国語辞典からすればまあこんなもので、他の辞典も大同小異である。日本で随筆文学と言えはまず第一に挙げられるのが、『徒然草』とか『方丈記』とかになるだろうが、これらが「見聞・経験・感想などを気の向くままに記した文章」であるかどうかはさておくとして、随筆＝エッセイという漫然としたオートマティスムに本稿はまずもって疑義を呈する。

それはフランス語における *essai* は「試論」「試み」の意味もあり……といった語義論議以上に、「エッセイ」という試みのまさに現在の意味に関わることである。<sup>5)</sup>

これについては、まずは次のような文言を示したい。これは今日の認識論的布置に関わることである。われわれの何気ない日常（およびその所作）に注意を喚起し、それにまつわる事どもに意を凝らした哲学的＝反哲学的営為を長きにわたって展開してきた鷲田清一の著書『「聴く」ことの力——臨床哲学試論』（TBS プリタニカ）からの孫引きで恐縮だが、テオドル・W・アドルノの言葉である。

「学問の手続き、ならびにそれを哲学的に基礎づけた方法との関連において、理念としてのエッセイは体系にたいする批判から徹底的な結論を引き出してくる。概念による強固な秩序より、締めくくったり先取りすることのできない経験の方を重く見る経験主義の理論でさえ、多少とも一定していると考えられた認識の条件を検討し、あたうかぎり切れ目のない関連のなかで認識を展開するものであるかぎり、体系的であることに変わりはない。経験論も、合理主義に劣らず、ベーコン以来——彼自身エッセイストであったが——「方法」であった。方法の無条件の正しさにたいする懐疑は、思考そのものの運びにおいてはほとんどエッセイによってのみ実地に移されたのであった。エッセイは、暗黙のうちに、非同一性の意識を斟酌している。それはラジカリズムを標榜しないことにおいてラジカルであり、原理への還元を極力慎み、全体にたいして部分を強調する点において、断片的なものにおいて、ラジカルである。」（アドルノ『文学ノート』三光長治ほか訳、傍点引用者）

ここにはいくつかのキーワード（傍点部分）があり、それを原文の文脈の中で把握してほしいため長めの引用を取って示した。

まず「非同一性」の概念だが、「同一性（ないし自己同一性、アイデンティティ）」という言葉はその原義を離れて、あまりにも安易に流通・伝播している嫌いがあり、この現象は取って言えば現代文明の病理ですらあるのではないのかという疑念がある<sup>6)</sup>。ここでやはり問

題とすべきは、「概念」のオートマティスムである。記号の自動作用と言ってもいい。平俗・平板極まりない「三段論法」の異とすら呼べない異に安穩と自足している様と言い換えてもよい。この「非同一性の意識」は体系なるものへの疑念、「方法の無条件の正しさにたいする懷疑」と深く関わっている。「ヨーロッパ諸学」に深甚な危機意識を抱いたフッサールは、たとえば、近代の主客二元論に対して、「間主観性」の現象学を提起した。これは平たく言えば、主体と主体、あるいは主体と客体の「間」の「インター性」こそが重要であるということだ（後にテル・ケルー派やクリステヴァなどが言う「間テキスト性」（インターテクスチュアリティ）などもこれに淵源する）。換言すれば、主体間の見えない磁場こそが問題だということ。しかし、これは容易に「概念化」できない（ここで、日本的「いき」という極めて概念化しにくい問題をあえて『「いき」の構造』として提起した九鬼周造に現象学の問題に腐心していたハイデガーがいたく感心したことを想起したい）。

ところで、かかる西欧哲学の「閉域」を果敢に打ち破ろうとしたのが先に挙げたフッサールの『ヨーロッパ諸学の危機…』なのは言うまでもないとして、そのフッサール自身さえが晩年、これが容易ならざることを悔恨とともに弟子に語ったという（鷺田前掲書参照）。ことほどさように、この「閉域」は手強いと言うべきか。

しかしであればこそ——モンテーニュなどの先例はあるにせよ、また若き日のG・ドゥルーズが研究論文を捧げたT・E・ヒュームという例はあるにせよ——鷺田の試みは多としなければならない。そして時間は前後するにしても、アドルノの友人W・ベンヤミンやわがシオランのエッセイの試みを今あらためて振りかえるべきではないかと考える。

この文脈で言えば、エッセイとはまずもって、既存の（だらしなく無自覚な）認知構造への背反・逸脱・疑義であるが、この「背反…」の意味合い、リアリティこそが考えられなければならない。

さて、そのアドルノの盟友ベンヤミンだが、彼の最初の邦訳著作集は晶文社版であり、細かい瑕瑾はあるにせよ、読書界史および思想史的にも画期的な著作集だった。それからかなりの時日が立って、現行のちくま文庫版の『ベンヤミン・コレクション』が刊行され始め、今回（2014年7月）その第7巻『〈私〉記から超〈私〉記へ』が上梓され、めでたく完結を迎えた（訳者代表・浅井健二郎氏にこの場を借りて敬意を表する）。

このコレクションの第二巻がいみじくも「エッセイの思想」と題されているが、これは無論のこと浅井氏のベンヤミン理解の深さを自ずから証だてるもので、たとえばこの『コレクション』の巻頭には浅井氏によると思われるエピグラフが掲げられている。

「文学作品を、その時代のもつ連関のうちに叙述することこそが大切だ、というのではない。大切なのは、それが成立した時代のなかに、それを認識する時代——それはわれわれの時代である——を描き出すことなのだ。これによって文学は歴史の感覚器官となる。」（ベンヤミン『文学史と文学研究』1931年）

末尾の「歴史の感覚器官」という言葉に注目したい。これを「曖昧」な表現とやり過ごすのではなく、この言葉が発せられたさまざまな文学的・制度的（歴史的）状況をこそ勘案すべきだが、何でもかんでも「学術的」であることにこだわる向きのために敢えて言えば、その時既に胎動していたアナル派の歴史認識を考え合わせてもよい。「同時代性」とはそういうことであって、いまさら「異業種交流」などという寝惚けたことを言うレベルの話ではないことは、念のため言っておく<sup>6)</sup>。

元に戻れば、ここで言う「感覚」という言葉をやりすごすべきではない。アナル派は——とりわけアラン・コルバンの営為がそうだが——「感覚の歴史家」と呼ばれる。なぜか。A・コルバンで言えば、『においの歴史』（これはドイツの作家P・ジュースキントに『香水』というベストセラー小説を書かせ、映画化もされた）、『娼婦の歴史』『海辺の歴史』と続き、直近では『影の優しさ——古代から現代へと至る感情の起源たる樹木』（Fayard、2013）があるが、ここで端的にわかるのは、在来的な概念的アプローチとして「歴史」を捉えないという姿勢である。つまり「伝統的な」概念把握から零れおちるものにいかにセンシティブになるかという姿勢であり、それが自ずから近現代小説への捉え返し（典型的には今まで不当に等閑視されていたゾラの営為の再評価で、コルバンはこの文脈でゾラに言及している——cf. 宮下志朗・小倉孝誠編『ゾラの可能性』藤原書店）にも繋がるということである。これが単なる表面的な「学術」的流行ではないことに改めて留意されたい。

そこで先にも触れた、わが九鬼周造の『「いき」の構造』が浮上する。「いき」とは何か。この言葉の抱え込むものは、花柳界に属するかもしれないが、同時に一般に用いられる（た）ものでもある。シック sic と言ってもいいが、それだけでは十分ではない。そういう「余剰部分」を抱えたものがまさにこの「いき」という言葉だが、それにこだわった九鬼の著作が現象学なるものに腐心していたハイデッガーの心を捉えたのは想像に難くない。ではそれを、われわれはどう引き受けるのか。

その時、鷺田清一に習えば、「エッセイ」の思想が浮上するということである。

もう少し鷺田の言うことに付き合っていただきたい。たとえば彼はアドルノに依拠しつつ、こんなことを書きつける。

「エッセイの行き方は方法的に非方法的である」——これがその（アドルノの、引用者註）宣言である。エッセイはある話題からさりげなく説き起こすのだが、「一切を語り終えてからではなく、ここが潮だと感じたところで切り上げる」といった冷静なしなやかさをもっており、始源からじぶんを組み立てたり、終極に向かって環を閉じようとししない。ひとつの理念ですべてを囲いつくそうとすることの、あるいはすべてを見透かそうとすることの思ひ上がりに敏感なのだ。そしてそれゆえに、官僚のようにじぶんの用いる概念の定義にばかり拘泥している論証主義的な思考や、その「すべてを網羅することにあくせくしているみみっちい方法」よりも、はるかに緊張感のある足どりで、前進というよりぐるぐる回りをする。



「エッセイは定義にこだわるやり方以上に、精神的経験の過程における概念相互の交互作用を促進する。……思索も一意邁進するのではなく、諸要素は絨毯状に交織される。この交織の密度に、稔りの豊かさはかかっている」というわけだ。」（鷲田、前掲書、傍点引用者）

この「方法の非方法」、あるいは「非方法の方法」。なぜ、こう「くどく」引用するかというと、「文豪」だの、「小説家」、「評論家」だのがうれしそーに喋々される下司な文学風土にあっては、そういう価値観の下らなさをいくら強調してもしたりないとも思うからでもある（先の馬鹿げたノーベル賞騒ぎの「ハルキスト」なる現象を見よ。文学なるものがあるとして、それは多様な読書によってこそ支えられるはずのものだろう）。

そうなれば、傍点を施した「官僚のようにじぶんの用いる概念の定義にばかり拘泥している論証主義的な思考」については贅言を費やすこともあるまいが、あえて言えば、この「論証主義的」ということのまやかしがある。言葉とは当然記号的側面を併せ持つものだが、同時に記号を乗り越えるものでもある。これは自明のことだが、たとえば「官僚」はそれをあえて——つまり意図的に無視する。そこで、ありえようもない「法文」を盾に取るということも起こる（敢えて言うまでもないことだが、法は踏まえるものでありこそすれ、盾に取るものではない。のみならず、たとえばアドルノが言う認識論の歴史＝布置をおよそ無化したような言説がまかり通る）。周知のように、これはほぼ日常茶飯事である。かかる自堕落な「読み」とも言えない「読み」をしゃあしゃあと「実践」している部分があればこそ、アドルノの文言（cf.『啓蒙の弁証法』の苦い認識）があるということではないのか。そしてここに、今日的な「エッセイ」の批評的営為があると言うべきだろう。（やはりアドルノの『哲学のアクチュアリティ』に、こんな言葉がある。——「こんにち哲学者の新たな言葉は、歴史の布置（Konfiguration）を変容させることによってのみ形づくられるのであって、言葉に対する歴史の力を承認しながらも、たんに見かけ上歴史から守られているような私的な「具体性」へと逃げ込んで、この力を回避しようとする言語を発明することによって新たな言葉が形づくられるわけではないのである。」（「哲学者の言語についてのテーゼ」）ここでアドルノが言う Konfiguration とは、のちにベンヤミンが愛用する「星座的布置（Konstellation）」と「ほぼ同義」と訳者の細見は注記しているが、筆者もこれに同意する。この Konfiguration ないし Konstellation とは換言すれば歴史的座標軸とでも言うべきもので（しかしその座標面が単純に二次元平面であるとは限らない。さまざまな  $n$  次元であることも多々あるだろう）、思想家ないし文学者はこの「布置」にあたう限り地震計のように敏感であることが求められる。「歴史」と「現在の言語」の（あえて言えば）闘争とはそういうことであって、この「陰翳」を抜きにしたアドルノ＝ベンヤミン「理解」は基本的にありえない。「星座的布置」をすぐれて受け止めることは、歴史状況的な場に身を晒し、そこからどんな「認識」をもぎとるかということで、ここに現在／未来のそれこそ歴史的布置もある。であればこそ、問い＝エッセイである。あとはすべて墮文学のみ。（さらに付言すれば、アドルノは「私的な「具体性」へと逃げ込」むという言い方をしているが、この「私的な「具



体性」こそは語の最も真正な意味で、退嬰的な精神の所在を示す。どういうことか。略言すれば、それは、たとえばマルクスが開いた認識論的地平に「不感無覚」であることの証左ということである。「私」が「私」のまま無傷に温存されると思うな、ということだ。)

ここであえて、鷺田の著書の副題に触れておくべきかもしれない。つまり、なぜ「臨床哲学」か。

周知のように、医学には「基礎医学」と「臨床医学」とがある。大雑把に言えば、この二領域の往還運動こそがありうべき「医学」を形成する。医学の現状がどうかはさて措くとして、この構造の比喩が哲学にも用いられているわけで、鷺田の危機意識は、建前としての哲学が現場の哲学に何も機能していないということである。たとえば、ME 機器の高度化それ自体は慶賀すべきことだが、一方 CT スキャンや MR 画像の「記号的」画像から零れるものもある。というか、ありえないことだが、その高度の画像を「読めない」現場の医師もいないのが現状というものだろう。早い話、レントゲン画像ですら「読み」落す医師がいるのは経験的にも知られている。それはともかく、ここでの問題は、それが仮に正しいとして記号認識（画像認識）が患者のありようを全的に把握しているのかという疑義である。これは要するに、「近代科学」全体の方法論の問題に波及する（個々の事例がどうのこうのということではない）。

さてその時に、若き日の鷺田はファッションとかモード（つまり容易に概念化できないフィールド）を哲学的問題とした。その彼の営為に指導教授が何と言ったかはいろんな機会に鷺田が回想していることで贅言は差し控えるが、要するに、そんなことをしては「哲学」の世界で認められないということである。これと似たようなことは、今日、文化人類学の雄というか広く文化批評家としても認められている今福龍太の場合にも言える。若き日の今福が南米のあちこちを「放浪」していたところ、やはり当時の「指導教授」曰く、そんなことでは「学者」として認められない危険がある、と。退嬰的な精神とは、そういうものだ。ただかのアカデミズムを墨守するニンゲンと、本当の学問を見ようとする者。その差は今日、明らかではないか。

——さてそれはともかく、アドルノの「非方法の方法」である。ここにエッセイの今日的「力」がある。旧套墨守を事とする者には到底わかるすべもあるまいが、ここには近代的体系の自足性に対する本質的な疑義がある。それについては、アドルノの盟友たるベンヤミンのいまだ諸方から論議の絶えない「作品」として、『パサージュ論』がある。これは周知のように、一九世紀末におけるさまざまな言説の断片や引用およびそれに関わる若干のコメントから構成される「未完」の「書物」だが、それがあたかも無数の切子面を有する宝石のように、見る者にさまざまな光を発してやまない。ここに、「断片」と「全体」の問題がいみ

じくも露わになっているとされる。まさにそのことが、キルケゴール、ニーチェ、(フランスの) ジュベールなどの営為を新たな光学のもとに照らしだす。

(補足すると——きわめてアフォリズム的思想家たるアドルノの初期論集『哲学のアクチュアリティ』(細見和之訳、みすず書房)があるが、そこにこんな言葉がある。「こんにち哲学者が向き合っているのは崩壊した言語である。哲学者の素材をなしているのはさまざまな言葉の残骸であって、彼は歴史によってそれらと結びつけられている。哲学者の自由はひとえに、この残骸に残されている真理の強制力にしたがって、それらを布置へと構成する可能性のうちにのみある。彼はある言葉を所与のものと考えてはならないし、またある言葉を発明してもならない。」「(『哲学者の言語についてのテーゼ 7』) ベンヤミンに「歴史の天使」という魅力的な言葉があるのは周知のとおりだが、このアドルノの言葉は、歴史的状況と向き合う言語と認識の問題を見事に衝いている。また、次のような言葉にも留意されたい。「自己目的として獲得された分かりやすさなどは、すべて根元的な言語批判の標的である。」(同、5) 教条主義に墮することのない批判哲学の実践がここにある。)

ここで、一見シオランとは無縁というかある意味では対蹠点に位置するかとも思われよう名前を呼びだしてみる。ロジェ・ラポルト。彼は二〇世紀フランスの最高の批評家ともされたモーリス・ブランショの「唯一の高弟」ともされた存在だが、生前の著書はさほど多くはない。しかし、デリダをはじめ多くの限られた存在がその死に哀悼を捧げた。その彼に『ブルースト／バタイユ／ブランショ——十字路のエクリチュール』(水声社)『探究——思考の臨界点へ』(新宿書房、いずれも拙訳)というエッセイ集がある。その「訳者あとがき」に記したものの一部が本稿に関わるので、変改しつつ提示したい。

(ここで紹介するロジェ・ラポルトはストイックな執筆態度を終生変えなかったが)「永続的な哲学」とは対蹠点にいると言うか、絶えずそこから洩れ零れ、あるいは溢れ出ようとする人々への眼差しが目を引く。言いかえれば、認識の外部、「永続的な哲学」からは認識しえぬ他なるものへの眼差し、さらには余剰というか過剰なるもの——思考の臨界点——へのひたむきな眼差し、そこに彼の言うエッセイストの営為があるのではないだろうか？

「……詩的経験の中心にあるものを一瞬また揺り動かすこと、作品の絶え間ない、静かなつぶやきを声に出すこと、それがエッセイストの役割であろう。」(『パウル・ツェランを読む』)

まずもって、この件に目を瞠らされる、というか、立ち止まらされる。一見簡素で穏やかな言い方に思わず行き過ぎようとするのだが、何かが読む者の意識を引っ搔くとも言えるのか。当然のことながら、ここでラポルトの言う「エッセイスト」とは、自らの安穩とした「感想」やら「思考」を陳述して得々としているいわゆるエッセイスト(随筆家)のことではなく、未だ見えざるもの、未見のポエジーを探し求める者という意味での「読者(読

む者)」として、テキストとの「間」（インターテクスチュアリテの場）で何を考え、紡ぎ出すのかという問いに関わるものとしてあると取り敢えずは言える。そしてこのことは、しばらく前からきわめて鋭角的な議論が提出されている翻訳の問題とも関わるはずで、旧来の意味での「テキストとそれを読む者」、「オリジナルとそれを翻訳する者」という二元論的分割（そこにはラポルトも言うように——今更喋々するまでもないかもしれないが、しかし——「創造」なるものに関する退嬰的な思考ならぬ思考がある）ではなく、一つのテキスト（それは「字」には限るまい）に対して人はどのように関わるのか、関わりうるのかという「問い」のはずである。ラポルトが実践した、あるいは実践しようとしたこの「言葉と思考の現場」に視線を凝らすことは多くのことに道を開くのではないだろうか。それは、もっともらしい「求心的な」「文学的テキスト」だけではなく、それこそブランショ論の注でラポルトが言うように、たとえば「68年5月」のビラ・パンフレットへのブランショ＝ラポルトの眼差しを今日、われわれがいかに受け止めるかということでもあると思われるのだが……。また、贅言を費やすと、ノイズということがある（ラポルト自身は「騒音」が嫌いなようだが）。この言葉はいわゆるポストモダンの時代にやたら口にされたものだが、ここで想起すべき「ノイズ」とは、たとえば（唐突と思われるが）詩人・吉増剛造氏の抹消記号を付された「朗読」にこそふさわしいのではないだろうか。これは本書でラポルトが言う「晦冥」あるいは「謎」の言葉にこそ近いものであって、ジャコメッティが追い求めたもの、カフカが書こうとしたもの、あるいは「1790年」のモーツァルトが見ていたもの……にこそ近似的なものではあるまいかという仮説を敢えて付け加えておきたい。

ドゥルーズがかつてデュ・バルマとの対話で「人は母国語を口にする時、必然的に吃らざるをえない」と言い、デリダが、あるインタビュアーの問い（「詩人とは、下書き、口籠り、「口頭言語の試み＝誘惑」、失語とともにパロールの裏側を生きた者のことですね」）に対して、「そうです。あらゆる偉大な作家はあるやり方で失語(症)的なのです」と応えたこと(Derrida en castellano-Contresignatures [インターネット])、そして、「言語活動 [langage] によってしづけられた秩序へのあらゆる隷属から解放された、白いエクリチュール」(R・バルト『エクリチュールのゼロ度』渡部淳・沢村昂一訳、みすず書房)といった言葉から窺い知れるように、読む場あるいは聞く場で一瞬垣間見えては消えるもの、本書（『探究』）で執拗に言及されているように、モーツァルトのいくつかの作品、ベートーベンの第13番弦楽四重奏曲のカバティーナに耳傾ける時に一瞬現われては消えるもの……それこそがこの「エッセイという場」で問題とされているのではあるまいか。ここで賭けられているのは、言葉の狭い意味でのスコアの指示などではないだろう。そうではなく、たとえば、「ゆっくり、もっとゆっくり」という「指示」の向こうに見えつつあるものとは何か、ということ。そこに、エッセイストの思想が見え隠れしているのではあるまいか（同じ深淵または奈落をともに覗き込んでいる「書く人」と「読む人」……どうしてそういう「共有」の時空がともすれば「無化」されるのか——これについては今は問いのみを発しておく）。

＊

最後に、ベンヤミンのことを語っておかなければならない。

ベンヤミンの『パサージュ論』（岩波現代文庫）が断片と引用の集積なのは先にも触れたが、しかしそれがなぜこれほどの吸引力と喚起力を持つのかについては、問いは宙ぶりのままである。いやそれは一般的な言説であって、「われわれ」はそのある意味「暴力的な」ありように幻惑され続けている。

こんな言葉がある。

「気まぐれな断片に分かたれていながら、モザイクにはいつまでも尊厳が失われることなく保たれるように、哲学的考察もまた飛躍を恐れはしない。モザイクも哲学的考察も、個別的なもの、そして互いに異なるものが寄り集まって成り来たるのである。（…）思考細片が基本構想を尺度として直接に測られる度合いが少なければ少ないほど、思考細片の価値はそれだけ決定的なものとなり、そして、モザイクの輝きがガラス溶塊の質に左右されるのと同じように、叙述の輝きは思考細片の価値にかかっている。断片（…）が（…）知的な全体という尺度に対してもつ関係に見てとれるのは、真理内実は事象内実の個々の細部のすみずみにまで沈潜していく場合にのみ捉えうる、ということである。」（ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源 上』ちくま学芸文庫、傍点引用者）

『ドイツ悲劇の根源』は1925年フランクフルト大学哲学部美学科に提出された教授資格申請論文だが、たとえばここに見られるように、今日からすればきわめて妥当というか先駆的な見解が、おそらくはかなり傲岸というか意味不明なものと映ったのは想像にかたくない。このことによってベンヤミンにはアカデミズムの門は閉ざされたが、この“挫折”のおかげで、今日われわれが繰り返し緋く彼の思考がもたらされたと考えたと皮肉である。ありていに言って、当時の審査員たちは「歴史的な恥」をさらしたのである。

それはともかく、ここでさり気なく示された「断片」に関わる思考は決して軽くはなくて、後の「全体と個」「断片の意味」「エッセイの思想」に繋がるものと言ってよい。つまり、「全体」への妄執とはとりもおさず近代の主客二元論の裏返しにほかならず、部分の集積が決して全体にはなりえないことの思想的詭弁でしかないことを認めまいとすることから結果している。そこから予定調和的な「全体」あるいは「完成」へのわけのわからぬ志向性が生まれるという次第。

しかしここは、そういう「近代的思考」の限界性を指摘する場ではないので、すぐれて「断片」の、「断章」のエッセイスト・シオランに戻りたい。

なぜシオランが「断章」のエッセイストなのか。

とりあえず言えば答えは簡単で、彼が「体系」というものをテンから信じていなかったからである。状況に応じてものを言うと言え、これはまた別の意味作用を持ってしまうが、

そうではなく、しかるべき時にたまたま居合わせて、考えるべきことを考え、言うべきことを言ったとでもいえばよいのか。そう言うと、なにやら身も蓋もない話になるかもしれないが、有態に言えばそういうことではあるまいか。名著『歴史とユートピア』も、その刊行時日からすると妙な「深読み」をされる危険なしとしないが——そして実際そう読まれてもおかしくはない鋭い見解が含まれているのだが——、まあ「高級な冗談」として読むほうが無用な誤解は避けられよう。

あえて無粋なことを言えば、このような思想的・文学的系譜の上に、シオランは位置づけられると言うべきか、と言いかけたところで慌てて口を噤みたい。それこそ「野暮なことを言うな」と冥界から叱られそうだからである。ただ、かつて文字通り「衝撃を受けた」彼の『歴史とユートピア』については、遅ればせのコメントを付しておきたい。

＊

### 〈『歴史とユートピア』をめぐる〉

『歴史とユートピア』（“Histoire et Utopie”1960、コンバ賞受賞、邦訳1967、紀伊国屋書店）は本邦にシオランが紹介された最初の書である。書名で端的に示されているように、これは歴史という時空の柵に囚われたニンゲンという生き物がそれにもかかわらず（あるいは、それゆえにこそ）希求せざるをえないユートピア（それは往々にして逆ユートピアと化す）をめぐる思考の書で、人は一見その苛烈な認識に接して思わず腰を引くかもしれない。だが慌ててはいけない。シオランの辛辣な言葉はラ・ロシュフーコーのように辛辣のまま決して終わることはなく、そこには韜晦と諧謔が満ちている。だが同時にここには、直近の、ソ連邦の軍事介入が惹起したハンガリー動乱（1956）の記憶が揺曳していることも見逃すまい。むろん、動乱そのものが直接的に言及されているわけではないが、パリの屋根裏部屋で長いこと暮らしながら、訳者の出口裕弘氏への私信で骨の髄までルーマニア人だと嘯くシオラン、大国に翻弄され続けてきた小国を故郷とするシオランにこの事件がどんな思いを抱かせたかは想像に余りある。<sup>7)</sup>

さてそれはともかく、「ロシアと自由のウイルス」「暴君学校」「怨恨のオデュッセイア」等魅力的な章タイトルが目次に並ぶ本書にたちまちのめり込んだのは言うまでもないとして、ここには今でも何度でも辿り直したい言葉、直ちに引用したい文言が目白押しである。

任意に引くと、たとえば次のような箇所。

「政治の誘惑に屈伏するまいとすれば、絶えまなく自分を監視していなければならない。どうしてそんなことができるだろう。わけでも、猫も杓子も権力をめざすことができ、自分の野心に存分に羽を伸ばさせることができるという、致命的な悪弊を持つ民主制においては至難のわざである。だからそこには、ほら吹きどもがうじゃうじゃ群れ、おのれの星を持たぬ議論屋が繁殖する。これはいかがわしい狂人どもであって、宿命のほうで烙印を押すのを

ことわるような、本当の熱狂にはさっぱり不向きで、勝利にも崩壊にもふさわしくない連中だ。」(本書「Ⅲ 暴君学校」、傍点引用者)

「おのれの星を持たぬ…」という件に若き小生は熱狂したものだ。これは別段大袈裟な宿命論といったものではなく、とりあえずは、「柄でもない輩がエラソーなことを言い募っている」ほどの意味だが、もう一つには、たとえば党派の差異はどうあれ、「英雄、英雄を知る」という理が無化されているのが他ならぬ「議論屋」ということで、かかる輩が百出する現状をうんざりこいて眺めている図と見ればよい。わが魯庵にあえて擬すれば、「字つなぎの術にたけた」だけの明治二十年代のわけのわからぬ物書き連中に嘆息する眺めとしてもよい。

さて、そうであればこそ、同書第一章「社会の二つの典型について——遠方の友への手紙」の嘆息も偲ばれるというものだ。しかし、これには何がしかの説明があるかもしれない。ここで「兄<sup>けい</sup>」と呼ばれている「遠方の友」の詳しいプロフィールは無論不明だが、オーストリア＝ハンガリー帝国、とりわけハンガリーの「横暴」に蹂躪され続けてきた小国ルーマニアの同郷人であり、かつその歴史的苦渋の記憶を共有する者であることは「手紙」からも容易に窺い知れる。本書の他の箇所では出会った「ロシアはやがて自由というウィルスを知るだろう」という一句が未だに忘れられない。しかし、この間の歴史的経緯を見れば誰しも頷くようなシオランの「予言性」などが問題ではない。そうではなく、長きにわたってその時々「大国」に翻弄されてきた歴史をもつ小国の人間であればこそその「歴史」の命運への眼差しに、及ばずながら溜息が出るのであり、であればこそシオランの言う「おのれの星をもたぬ議論屋」に吐き気がするということだ。言うまでもなく、これはルーマニアに限ったことではない。

それはともかく、本書（に限らないが）には引用の誘惑に抗しがたい章句が枚挙に暇がない。試みに最低限のレベルで引いてみようか。

「自分の無価値を知り、これに長いことかまけていれば、かならずそれに官能的にしがみつくことになる。……幸福のはかなさを告発しようと躍起になること自体、一定量の幸福を含む。」

「二十世紀に固有の色調を与えた功績は、スターリンよりもはるかにヒトラーの方に帰せられるべきだろう。この男の重要性は、その人物によりも、むしろ、彼が何を予告しているかという点にある。」

「純粋な感情などというものは、生命力という荷をすっかり下ろしているのだから、それ自体ことばの矛盾であり、不可能性であり、つくりごとである。」

「生とは決裂であり、異端であり、物質の規範に対する違反なのである。」

一々の文言には、それぞれ付記したいことも多々あるが、まずは禁欲しよう。

見られるように、これらは、『火箭』や『赤裸の日記』のCh・ボードレールを数オクターブ引っ張り上げたような言説と見えようが、慌てるなかれ。先にも述べたように（そしてここでは屢説できないが）かかるレベルにおいてもシオランは決してユーモアを忘れていない



ことを急いで付け加えておかねばならない。

最後に、シオランという書き手が、西欧デカダンスを一気に堰き止めてその重みに耐えつつ、さまざまな変奏を凝らしたことの意味合いをわかる人にはわかってほしいと思うのみである（シオランには『カイエ』と称される膨大な遺稿というか日記もあり、また既存の多くの著書からも引きたいものは多々あるが<sup>8)</sup>、紙数の限りもあり、他日を期したい<sup>9)</sup>）。

（了）

#### 註

- 1) パトリス・ボロン『異端者シオラン』（金井裕訳、法政大学出版局、2002年）
- 2) ペソア『不穏の書、断章』（澤田直訳、思潮社、2000年）
- 3) 「無駄話」「与太話」の意味ならぬ意味については、次のようなエピソードを披露しておこう。フランス文学者で「虫狂い」の書き手に奥本大三郎という人がいる。ファーブル『昆虫記』の個人訳を出し続けている。この人に、なぜ大学教師をやめたかという趣旨のエッセイがあるが、大略以下の通り。  
……授業にとりあえず「関係のない」無駄話をしていると、学生たちは空耳を走らかしている。ところが、「次の試験はね」と言うと、一斉に彼らの目が教壇に集中する。これに接した時、私は教師を辞める決意を固めました……  
まあ、そんなもんだろう。ちなみに、このエピソードの時、彼は横浜国大の教師であった。  
ここで示唆されるのは次のような疑念である。手近な役に立つ（と思いきまれている）薄っぺらな「情報」や「知識」を与えるのが「授業」なのか。むしろあとで本当の意味で「役に立つ」のは一見意味のない「無駄話」や「与太話」ではないのか。いつの間に、こんな貧しい価値観ならぬ価値観を持つようになってしまったのか。こんなことでは、元々「馬鹿話」である落語を楽しむことすらできないだろう。  
しかり、しかり。さて、どうします？
- 4) 評判の「白熱教室」（NHK 第二チャンネル）で、過日ケンブリッジの教授が「実存主義」を取り上げたことがある（岡山では2014年10月10、17日23：00放映）。この番組は以前に「映画の見方」などでも、興味深い授業を展開しているが、巷間喧しい「わかりやすい授業」とは一味も二味も違う。一言で言えば、非常に「質の高い」授業で、一見「わかりやす」そうに見えながら、ここで語られていることを理解するためには付帯的知識をちゃんと身に付けていなければ、ありがたがられる「わかりやすさ」も無意味で、つまり「わかりはしない」。つまり、「わかる」ということは当の知識を通俗的に平板化することではないということ。聴衆に一定のハードルを課さない講義に「わかりやすさ」も何もない。
- 5) いまさらわざわざ言うのも馬鹿馬鹿しいことだが、ここ十年の日本では、「小説家」が一番エライしくて、であればこそ先の（2014年秋）のロクでもない「ハルキスト」騒ぎも起こる。そのバカ騒ぎに乗った上であえて言えば、「小説の世紀」は19世紀であり、20世紀は「批評の世紀」とさ

れる。こんな規定はまあどうでもいいが、あえてジャーナリスティックに言えば、「小説」とは過去の遺物である。にもかかわらず、今日でも小説なるものが書かれ続けるのはなぜか。そこには、たとえばクロード・シモンのような文字通り「悪戦苦闘」であると同時に静かで着実な営為がある。それを見ずして、ナントカ賞受賞だのという愚かしいことを言うな。念のため言えば、C・シモンは当然のことながらノーベル文学賞を受賞している。しかし、だから何だと言うのか。彼の小説をすんなり「楽しんで」読める読者がどれほどいるのか。

ついでながら、モンテーニュについて一言。彼の『随想録』は現行では『エッセー』と訳されるのが一般である（cf. 宮下志朗個人訳の『エッセー』白水社）。これは訳者が *essais* の的確な日本語訳をおさなりにしているわけではなくて、「エッセイ」＝「随想・随筆」とする逐語訳というも愚かな自動作用を拒否することに由来する。この「拒否」に文学・思想の認識論的断層＝布置がある。言うまでもないことだが、『エッセー』は各項目に間歇的に加筆が加えられて今日の姿になっているわけで、これは彼が生きている限り絶えず「増殖」する書物である（cf. J・スタロバンスキ『モンテーニュは動く』みすず書房、M・ビュートル『エッセーをめぐるエッセー モンテーニュ論』筑摩書房）。すなわち、断片の集積としての書物＝反書物。これは遥かに20世紀の W・ベンヤミンの『パサージュ論』と呼びかわすものである。

- 6) 「アイデンティティ」とはそもそもアメリカの心理学者 E・H・エリクソンが「青年期の心理」の機序を考察するために設定した作業仮説なのだが、いつの間にか、そうしたものが元々「実体的に」あるかのように「流通」してしまった嫌いがある。所謂「学術用語」と称されるものの記号的流通の典型と言ってよい。そのために、どれほどの若者がありもしないアイデンティティを求めて悲惨と言うほかない「自分探し」の旅に出かけたかは、多くの事例が自ずから示しているよう。一例を挙げれば、かつてイラク戦争の折「自分探し」に出かけた青年がアルカイダの捕虜となったことがあったが、その報に接した映画監督井筒和幸が苦り切った調子で吐き捨てた TV の画面が印象的であった。余計なことを言えば、「青い鳥」は山の彼方にあるわけではない、幸せは「今、ここ」にあるということだ。ここで優れた箴言的詩人だった茨木のり子の詩を思い出す必要があろうか。
- 7) 『歴史とユートピア』「訳者あとがき」には、こうある。「法的には「無国籍」であるが、「現在も未来もルーマニア人だ」と彼（シオラン）は書いている。」
- 8) シオランに言及するに当たって逸すべからざるものに阿部良雄『西欧との対話——思考の原点を求めて』（河出書房新社、1972）がある。これは、きだみのる、森有正、バルテュス、イーヴ・ボンヌフォワ、宮川淳等々、日本およびフランス・ヨーロッパのすぐれた知識人・芸術家・文学者への「私信」の形式をとった文明論・状況論だが、その中にほかならぬシオランへの手紙も収められている。そこにたとえば、こんな言葉が見られる。ジョゼフ・ド・メーストルに触れつつ、「奇矯過激を誇張にみちた文体で書き綴ったこの哲学者（\*ジョゼフ・ド・メーストルのこと）が、書簡の中では社交人らしい愛想の良さを示していることに触れて、「思想家はその狂気を作品の中にそそぎ、その良識を他者との関係のためにとっておくのが普通である」と書いておられます。すなわち、友人や知人を相手にする場合は、有限なる存在としての条件を受けるのに対し、「観念との差

し向かい、たわ言を並べるように促し、判断を曇らせ、全能の錯覚を生み出す」ということでもあります。この「私信」が孕みこむ（あるいは両者の間でとうに交わされた）見えざる「対話」こそが、ありうべき「知的優雅さ」というものだろう。がさつに「文献」ばかり漁ればいいものではないと図らずも言いたくなるのは、こういう言葉に接した時である。人は時に沈黙を守ることがあるということだ。その「断念と失語」の構造を時には思っほしいとのみ言っておく。

- 9) この『カイエ』はやはり金井裕訳で法政大学出版局より刊行されている。氏のシオラン邦訳に関わる多大な貢献には改めて敬意を表したい。